

---

# 僕の世界

望月

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

僕の世界

### 【コード】

N1582B

### 【作者名】

望月

### 【あらすじ】

受験シーズンのひと時を織り成す、高校3年生の恋愛物語？

雪が降った。

今日も昨日も、真っ白な雪が降った。

明日も降るだろう、明後日も降るだろう。

世界はゆっくりと白く染まっていく。

一面が白銀（白銀）に染まり、太陽が沈んでいく。

あの太陽は、明日昇っているのだろうか？

辺りに何も無い、真っ白な平原。

僕は、一人で寝転んでいる。

無音の音が耳に響き、自分の鼓動がはっきりと分かった。

指先から少しずつ体温が消えていくのが分かり、かすかな痛みを

帯びていた。

僕と世界は、つながっている。

かんどりようこう  
感度良好、通信準備完了。

メーデ、メーデー。

世界、応答願います。

僕はというと、どこにでも居る高校3年生だ。特徴がないのが特徴、成績は中の中、友好関係もそこそこの受験生。

名探偵だったり、生まれもつての殺人鬼だったり、天才だったり。

そんな能力は、どこにも持っていない。漫画は好きだけでも、最強

なんて全然関係ない。

そんな人生を僕は割りと気に入っていた。

何もない世界、何もないと感じていた心、何もない自分。そんな

僕は、今はもう居ない。

僕は知ってしまったから、世界が居ることを。僕は気付いてしまったから、世界があることを。

聞いてしまったから、世界の声を。

「硯すずりさあゝ、なんかあったの？」

時間は午後4時、授業も掃除も終わった放課後のこと。  
唐突とうとつに前の席に座っている友人Aに話しかけられた。

「友人Aって酷いんじゃないですか？」

「地の文に突っ込みを入れないでください、読心術の達人ですかあ  
なたは？」

この超人的技能を持っているのは、クラスメイト・友人・恋人の  
3つをかねそろえている 相葉あいば 雪ゆき、通称は雪、略称も雪。

「それよりさあ、何かあったの？」

「なんで？」

「うゝん、なんっていうか変わったたかな？」

「僕が？」

「うん、なんとなくく雰囲気かね」

「へえ」

僕は欠伸をしながら、机に突っ伏した。眠い、寒い。

「っっていうかさあ、テンション低すぎ!!」

「そうかな？」

「そうだよ、もっと元気にいこうよ」

「疲れた、主に人生に」

「死ね」

僕の世界

晴れやかな笑顔で、雪は頬杖をつきながらそう一言、僕に向かっ

て言い放った。

さすがにその一言に反応して、僕は机から顔を上げて非難の声を上げてみた。

「それは、彼女のセリフとしてどうかと思う。むしろ人間としてどうかと思う」

「いや、人生に疲れたって言うから」

「ひどい、鬼畜、外道」

「いっぺんマジで死んどく？」

雪の顔が笑顔から一変し、冷たい無表情に変わった。気のせいか、雪の後ろに鬼の顔が浮かんでいる。

ここは三十六計逃げるにしかず。

あやまるう。うん、命は欲しいな。

「ごめんなさい」

「よろしい」

雪の鬼の表情が、いつもどおりの優しい表情へと戻った。本当に殺されるかと思った。くわばら、くわばら。

「つで、白状してみようか？」

「これって尋問？」

「拷問のほうがいい？」

「発想が怖いよ！つてかそんなに僕をいじめたいの！？」

「まっさか。素直に言えば、何もしないよ」

それは素直に言わなければ拷問するって言う暗示ですか？

「そのとおり、だから素直に話したほうが良いよ？」

「だから地の文で会話しないでよ！」  
「ほら、ちゃっちゃんと言わないと」  
「何かあったかといわれたら、世界を見つけた」

雪が笑顔のまま、フリーズしていた。およそ3秒で思考回路が回復したようで、雪は手をこちらに伸ばし肩を握った。

「硯、いい？ちゃんと聞いてね？」  
「なに？」

「病院行こう？」

「話したらそれかよ！？」

「だって、言ってることが危ないんだもん」

「だから言うの嫌だったんだ・・・」

僕はそう言って、再び机に突っ伏した。

「でもまあ、信じるよ」

「何が？」

「世界を見つけたって言うやつ」

「どういう風の吹き回し？」

「だって、私が愛した人の言葉だもん」

「恥ずかしいセリフ」

「でも好きでしょ？こういうセリフ」

「悪い気はしない。好きな人から言われてるから、なおさらね」

「恥ずかしいセリフはお互い様だね」

僕たちは、お互いの顔を見て笑って。

何が楽しいのかなんて考えず、笑いたいから笑った。

「でさ、世界って何なの？」

「よくわかんない」  
「なんじゃそりゃ」

見事な突っ込みが胸に飛んできた、将来お笑いの線も考えていこうかな。まあ、僕じゃあお笑いは無理か。

かんわきゆうたい  
閑話休題つと。

「ん〜、感覚に近いもの」

「訳わかんない」

「え〜つとねえ。なんとなく未来とか過去とかが分かったり、声が聞こえたり」

「よし、今から病院に行こう」

「信じるって言ったのに!？」

「いや、さすがに電波系過ぎるかなあ」  
でんぱけい

「いや、自分でも言ってると思うけどもさあ」

溜め息を吐いて、視線を窓の外に逃がした。

「まあいいけどね、それよりも今日帰りに硯の家に行っていていい?」

「え〜、めんどくさい」

「行きた〜い、ねえ良いでしょう?」

「ああ〜、分かったから。肩を強く握らないで、マジで痛い」

ギリギリと肩に食い込んでいた10本の指が、僕の肩から離れた。痛みを伴わなければ、名残惜しいとも思ったのだろうか。

残念ながら、今は命拾いしたという感想が頭に浮かぶ。

かくして僕は雪を自宅に招待するはめになった。

吐いた息が凍りつき、辺りに霧散した。雪を踏みしめる音が響き

わたるほど、僕たちの口数は減っていた。

緊張と安心と安らぎ。

僕たちは言葉でしか伝えられないものもあるし、言葉では伝わらないものもある。

今の僕たちに言葉は要らなかった。

言葉がなくても通じている、繋がっている。僕と雪は世界を介して繋がっている。

「久しぶりだね、雪がうちに来るのって」

「そだね、2ヶ月ぶりくらい？」

「うん、前は毎日のように来てたのにね」

「早いね、2ヶ月って」

雪が声を漏らさず、顔だけで笑って見せた。微笑とも苦笑とも取れる笑いだ。

僕は表情を変えずに、空を見上げた。

この雪がすべて消える頃に頃に、僕たちはこの街から出て行かなくてはならない。

「早いね、もうすぐ雪は受験か」

「硯は先に推薦すいせんだもんね。抜け駆けだ、ずるいな」

「そういわれてもなあ、それより着いたね」

住宅街、二階建ての一軒家。僕にとっては住み慣れた、雪にとっては通いなれた家。

「うん、お邪魔します」

「先に部屋行って、飲み物とか用意していくから」

「勝手知ったる他人ひとの家ってやつだね」

「そうだね、適当にくつろいでて良いから」

「うん、くつろいで待ってるよ」

雪は階段を上って僕の部屋へと向かった。

僕は居間へ行き、鞆を椅子の上においてキッチンに入った。冷蔵庫から牛乳を取り出し、牛乳をポットに入れてコンロにかけ、ホットココアを作り自分の部屋へと持っていく。

部屋のドアを開けると、雪は僕のベッドに横たわりお菓子を食べてながら本を読んでいた。

「いや、確かにくつろいでてって言ったけどもさあ」

「おつ、ホットココアだ。美味しそうだね、今ちょうど良いところだからそこに置いておいて」

「でも、久しぶりだね」

「そうだね、前は冬になるとホットココアのみに来てたのにね」

雪は漫画から視線をこちらに移し、すぐにまた漫画に戻した。

「ねえ硯、あの約束ってまだ有効？」

「あの約束って？」

「結婚してくれるって約束」

ココアと一緒に空気まで飲み込んで、僕はむせてしまった。

せきが止まり、空気を正常に取り込めるようになってから横目で雪を見た。

「いつの話を持ってきているの」

「小5ぐらいの時のなし。まだ期限は有効だよね」

「それは脅迫おどかしめ？」

「ちがう、本当のこと聞かせて。硯の本当の心の声が聞きたい」

雪は漫画を見ていて、こちらを見ては居なかった。手に力が入っているようで、かすかに震えていた。強く握ったこぶしが、手に持っている漫画に少しだけ食い込んでいた。僕の漫画なんだけどもね。

茶化そうにも言葉が見つからず、息をひとつ軽く落とした。茶化したら、僕は死ぬだろうし。

「有効だよ、ってか期限は無限みたいな」  
「本当？」

このときになって、雪は二つの目は僕を捉えた。少しおびえたようすの雪を見て、僕はいつものペースで対応してやる。

「本当」  
「そっか、そうだよ。ありがとう」  
「どうかしたの？」

僕がそう聞くと、安心した様子だった雪が少し俯いた。

「私ね、やりたい仕事があるの。でもさ、結婚しちゃったら仕事できななし」  
「なんで？」  
「だって家事とかしなきゃ。硯だって仕事から帰ってきたら、誰かが家にいたほうがいいでしょ？」

なんか、どんな凄いことを言ってくるのかと思っただら。まあ、雪にしたら大事なことが。

一応僕にとっても大事なことなんだけどもね。

「雪が働いて稼いでくれるんなら、家のこととかは全部僕がやる。雪はやりたいことをすれば良いし、帰ってきたらちゃんと僕が向かえる」

「硯はそれでいいの？」

「別にやりたい仕事があるわけでもないし、幸い雪さいわよりも家庭科の成績良いし」

「そりゃあ、硯のほう料理できるし掃除もするかもしれないけどもさあ」

「家計が苦しければ僕もバイト探したりする、家は僕が経済は雪が支えあえばいい」

「そっか、ありがとう」

顔を上げた雪は、いつもの雪に戻っていた。

傲慢ごうまんで、暴力的で、自己中心的で……

「いえいえ、その代わり遊んで暮らせるぐらい稼いでね」

「生意気、っていうか散々好き勝手言ってたよね？傲慢とか、暴力的とか」

「えっ、いや、だから地の文を持つてくるのはやめっ」

言い終わる前に足を取られて、四の地固めに持っていかれた。一口真つ青な速度と完成度を持った四の地固め。

芸術的と見ている人は言えるだろう、技をかけられている僕は痛いといとしかいえないけども。

「読み終わったー、そして疲れたー」

「雪、読み終わったんならそろそろ帰ったほうが良いよ」

「なんで〜？今日塾ないし、まだ居れるよ」

僕は視線を窓の外に移した。

空からは、ゆっくりと粉雪が舞い降りて幻想的な世界を築き上げていた。風は無いらしく、穏やかな世界がそこにはあった。

「もう少ししたら吹雪いてくる、ような気がする」

「なにそれ、勘？」

「勘に近いもの、でも多分本当に吹雪く」

「ふくん、まあ良いけどね。それじゃあ帰るね」

雪はベッドから立ち上がり、自分のコートを着て部屋を出た。

僕は雪のあとを追って、玄関まで見送りに行った。

「またおいで」

「うん、じゃあまたね」

ココアの飲み終わった雪と僕のコップは、まだ少しだけ熱を持っていた。

窓から見た違う世界は、少しだけ表情を変え始めていた。

学校の授業が一体なんの役に立つのか。誰でも一度は考えたことがあるだろう、高校生で受験を終えた身ならば、なおさらだ。

昼休み、自分の弁当を食べ終わり一休みしながらそんなことを考えていた。

まあ、センター試験を控えている受験生には確かに必要だろう。

しかし、推薦で合格通知しうかくつうちの届いている僕には退屈の一言ぶあ！！

「気のせいかな、なにやら自慢や嫌味が聞こえたなあ。受験生のストレスを侮あなごつちや駄目だぞ、硯すずり？」

雪の延髄蹴りが、見事に僕の後頭部に炸裂した  
目の前が真つ暗に変わり、意識が遠のく。視界が正常に戻り後頭部の痛みを認識した時、机がすぐ目の前に迫っていた。  
後頭部をさすりながら、犯人を睨んだ。

「雪、人間の後頭部を蹴るのは危険だよ。先に言っておくけども、前も危険だからね？」

「いやー、昨日は硯の言うとおり帰って正解だったよ。あの後、本当に吹雪きだすんだもん」

話を無理やり変えようとする雪に、内心溜息をつきながら話に乗っかる。

「今日も来るの？」

机の中から本を取り出して、視線を本に向けながら雪に声をかける

「来て欲しいの？」

「どっちでも、任せるよ」

「じゃあ行く、勉強教えて」

「いいけども、打撃も関節技も投げ技も禁止だよ？分からないからって、僕に当たるのは勘弁」

本から視線を雪にずらし、少し口を尖らせた。

「ダイジョウブ、何とかなるって」

英語みたいな発音で雪は応じたが、間違いなく僕の体はダイジョウブじゃないだろう。

本に視線を戻しながら、今日一日をどう生き延びるか<sup>しめたい</sup>を思索し始めた。

結論、死亡<sup>しほつかくてい</sup>確定。

毎日のように雪は放課後、僕の家<sup>うち</sup>に勉強に来た。最終的には僕に八つ当たりをして、蹴<sup>き</sup>ったり殴<sup>う</sup>ったり極<sup>き</sup>めたり。

そんな日々が何日も続き、とうとう雪が受験する前日になった。

僕は生きている、神様ありがとう。

問題は、雪が散歩に行つたつきり戻つてこない<sup>こ</sup>と電話があつたことだ。多分おそらく逃げたの<sup>た</sup>だろうと思う。

僕の家<sup>うち</sup>に電話が来て、すぐに僕は家を飛び出した。

声が聞こえる、いつからか聞こえるようになった声。

僕はこの声の主を世界だと思った。風が草が雲が雨が、自然のすべてのものが僕に話しかけてくる。明日の天気を知つたりとか、人探<sup>さが</sup>しとかに便利な能力だ。

声が聞こえる、頭の中に直接話し声が聞こえる。

少し町から外れた小さな公園。

僕はその近くにある自動販売機で、ホットココアを2本買って公園の中に入った。町から外れているので、遊具は最低限しか設置されて<sup>な</sup>いない公園。

ブランコ、半円型の滑り台、タイヤにシーソー。小学生の時に見た景色と、目の前に広がる景色は見事に一致していた。

変わらないな。そんなことを思いつつ僕は迷わず滑り台に近づき、<sup>くわ</sup>空洞<sup>くわ</sup>になつてる中を見た。

僕の世界

「やっぱり居た、変わらないなあ」

「硯には見つかったか、って言うか硯しか見つけれないか」

中で膝を抱えている雪に、先ほど買ったココアを渡した。7年前ぐらいに、僕はここで雪と約束をした。

ここで何度も遊び、それでもいつしか来なくなった公園。冷たい風が嫌なので、僕も滑り台の下に潜りこんだ。

「明日受験か、いやだなあ。おなか痛い」

「大丈夫、僕も放課後に勉強を教えただし」

「プレッシャーかけないでよ、本当にヤバいんだって。性格悪いな

あ

「知ってるー」

「硯、マジで絞めて良い？」

「だめ」

雪はボキボキと鳴らしていた指を、コートのポケットにしまって俯いた。

こんなに弱気な雪を見たのは久しぶりだ。

「いいよね、硯は。もう決まってるから受験しなくても済むんだもん」

「そうだね」

「なんで言い返さないの！？昔っからそうだよね」

「だって、僕は実際に終わっちゃってるし。本当のことを言われてるから、言い返す言葉もない」

雪の模試の結果が、志望校ぎりぎりなのも知っている。

毎日睡眠時間を削って勉強しているのも知っている。

それでも成績が伸び悩んでいることも知っている。

「なんで！？普段から勉強を頑張ったから、面接の練習も小論文の練習もあんなにしてたじゃん！」

「うん、でもやっぱり受験と比べたら楽なのはわかるから」

「ああー、もうー！最後にそういう言葉をかけるんだもん、ずるいなあ」

「大丈夫だよ、一緒の大学行くんだらう？」

「うん」

「じゃあさ、帰ろうか？」

「うう・・・」

「帰ろ？」

「ん、わかった」

僕たちは滑り台の下から出て、公園を後にした。雪を踏みしめながら、街灯の光を反射して光る雪を踏みしめながら家路いえじに着く。

2人してコートポケットに手をつ込みながら肩を並べて歩く。

「あのさ、頼みがあるんだけど」

「なに？」

「明日さ、会場までついてきてくれる？」

「ええ」

「だめ？」

「いいよ」

「ありがとう」

「どういたしまして」

「ねえ、硯？」

「ん？」

「愛してるぜ、ベイビー」

「me too」

僕の世界

僕たちの歩いた後には、足跡が続いていた。

(後書き)

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。

HPのほうでも細々と小説を載せていますので、是非いらっしてくだ  
さい。

[http://tukiiyonoutage.fc2web.co  
m/](http://tukiiyonoutage.fc2web.co<br/>m/)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1582b/>

---

僕の世界

2008年11月7日07時02分発行